

運如上人御一代開書・實信記・反故裏書等の諸書にも亦之を見ぬ。かく特別の寺號のなかつたことは、金澤御坊が本願寺自體の別院であつた爲であらう。而して何が故に本願寺の稱が誤傳せられるに至つたかは、今容易に明らかにし得ぬが、強ひて推測を言へば本願寺は本願寺の訛謬であらう。蓋し本願寺の別院をさして直に本願寺といふことは、今日に於いても尙之を見るからである。

(三)金澤殿—本願寺文書永祿十年九月廿五日のものに『金澤殿に奉寄進鞠室之座之事』とあり、同年十一月五日のものには、『金澤殿へ奉寄進鞠室之事』とも見えて、これらの金澤殿は、大坂本願寺を大坂殿というた如く、金澤御坊をさすものである。

(四)金澤御坊—この支院を金澤御坊とした稱呼は文獻に見えぬが、それはあり得たと思ふ。他にも山科御坊・吉崎御坊・大坂御坊・堺御坊など同種の名があるからであり、又後世も金澤の西本願寺別院のある所を御坊町(今は五寶町)というたからである。又越後高山本誓寺記所載天文廿二年の文書に、發信者自ら小山御坊役者と書き、同廿三年石田定賢等が本誓寺に興へた消息に加州小山之御坊主と書いてあるから、御山御坊とも言うたのであらうと思はれるが、しかしこの本誓寺文書は餘り正確なものでない。

(五)御山—金澤御坊の所在を指して御山といふたとの舊説は、吉崎御坊を御山といふところから類推してあり得ると思はれ、文獻の上では、天正八年と推定せられる七月六日附越中の波三秀次(波々伯部三河守)が、上杉景勝の將黒兵(黒金兵部大輔景信)に宛てた書狀

に『賀州表之儀、去月廿三日に於西河に合戦候而、御山之人數二百餘うちとられ候』とあるを初見とし、この場合では佐久間盛政勢を山・内の一揆が破つたことをいうてゐる。しかしその事實の有無は明らかでない。

(六)御山の陥落—金澤御坊が佐久間盛政等によつて攻陥せられて、加賀の一向一揆時代が終末を告げたことに就いては、閏三月廿四日付柴田勝家より宛所山田修理亮等の消息、及び四月廿二日付羽柴秀吉より宛所不詳の消息に断片的に見える外、太田牛一の信長公記以下確實なる史籍に一も記述を見ず、唯これあるは後世著された昔日北華錄のみである。而して昔日北華錄が如何なる資料によつて書いたかは明らかでないが、越登賀三州志も亦之に據り、大體に於いて誤謬が少いやうに思はれる。昔日北華錄の記述する所は次の通りである。曰く、天正八年閏三月柴田勝家は御幸塚に本營を置き、柴田三左衛門勝政・佐久間玄蕃允盛政をして先發北進せしめた。盛政乃ち山路を取り、吉野・劍・鞍・嶽・四十萬・若松より傳燈寺に進んで、所々の堡壘坊舎を焚き、勝政は海岸に沿ひ、安宅・本吉より宮腰に出た。次いで盛政は河北郡車の山を越え、竹橋を経て羽昨郡末森に向かうたが、河北郡の郷士等木越光徳寺に集つて抵抗の勢を示し、森下の龜田小三郎も之を援けようとした。因つて盛政は先づ光徳寺を攻めんとして、中條・今町に一隊を配して森下に備へ、自ら木越に向かうた。時に柴田勝政は宮腰より出で、大手に向かひ、能登より來り會せる長連龍は大浦の傍手を攻めたから、光徳寺は支ふるを得ずして能登に敗竄した。是に於いて諸將は最

後の一撃を御山に加へんと企て、勝政は宮腰口より進んで廣岡に陣し、盛政は鳴瀬越の山道より小立野に出で、拜郷五左衛門・徳山五兵衛は原川を隔て、勝政・盛政兩軍の中間を警戒した。御山の坊官は南越の役以後戦死した者が多かつたが、朝倉氏の遺臣にして來り投じた者もあつたから、之と力を併せて防戦したが、衆寡遂に敵する能はず、城將松永丹波以下黒瀬左近・平野甚右衛門・大窪大炊等皆倒れ、本誓寺・廣濟寺・惠林寺・善照坊等は城を盛政に致して去つた。盛政乃ちその圍郭を修築して、之を己の居城としたと。

川仇討話—カガハブタへ 加賀羽二重。
カナザハシサイ 金澤市宰 明治二年三月
從來の金澤町奉行を改めて市宰と稱し、町會所たる市政局に勤務せしめることにしたが、四年七月廢藩置縣の後之を止めた。

カナザハシヨウキ 金澤時鐘記 一册。
内題には『文政六癸未年御時法御定之濫觴私録』とある。遠藤高景が、從來加賀藩に於ける時刻測定の方法が不完全であつたから、測晷盤と正時版と曆とによつて正確を期し、従うて報時鐘の刻限を改定して十二劑とするに至つた理由を記したものである。

カナザハジセキヒツロク 金澤事蹟必録 一册。高澤平次右衛門忠順の著。金澤創始の來歴から、市中種々の事蹟を集録したものである。

カナザハジツケイ 金澤十景 妙玄夕櫻・岸川春霞・泉野桃花・増泉森禪・梅鉢清水・牛坂渡鳥・長谷山月・春日紅葉・孤松時雨・山科暮雪をいふ。俳人大橋卓丈と詩人池田九華との撰じたものである。

カナザハシヨウ 金澤庄 越登賀三州志來因概覽に、金澤の號は古庄號の擴充して國部の名と成つたのであらう。その故は、加賀の古庄名に金澤庄があつて、金谷門から連池亭・學校邊をしか稱したといはれるとある。しかし文書の上に金澤庄と書いたものはまだ発見し得ぬ。

カナザハジヨウ 金澤城 金澤の中舊石川郡に在る丘陵の尾端に築いた平山城で、城の廣袤東西六町十五間、南北六町八間。面積九萬一千六百三十坪、その中三萬二千六百三十六坪は塹壕とし、各部に本丸・東丸・新丸・玉泉院丸・二丸・北丸・藤右衛門丸・鶴丸・三丸・新丸等の名がある。武鑑に金澤城より江戸まで東海道經由百五十二里二十六町、北陸道經由百二十里半、中仙道經由百六十里餘、京都まで六十二里、大坂まで七十二里と記してある。この城地は、初め本願寺の伽藍を構へた所で、其の草創は實如の山科に於いて本山を董し、前住蓮如の尙在世した延徳中であつたといはれ、天文以降の文獻に、御山・金澤御堂又は金澤坊舎等の名で現れて居るのを見る。爾後この坊舎は一向一揆の策源地であつたが、天正八年に至り佐久間盛政は織田信長の命を奉じて攻陥し、直にこゝに居た。十一年盛政柴田勝家に従うて近江柳ヶ瀬に出で、羽柴秀吉の軍と戦うた。秀吉乃ち之を破つて盛政を擒にし、前田利家に盛政の前領を受けさせた。金澤城が城郭としての經營は、佐久間氏の時から稍整備し、惣構・二曲輪・二曲輪の區別を設け、多少の塹壕も亦本丸の周圍に掘鑿せられて、西町口を正門としたと言は